虚言少年　激闘編　目次

ソノ一・馬鹿（ばか）を嗣（つ）ぐ者……005
ソノ二・阿呆（あほ）も巣立つ春……067
ソノ三・鈍間（のろま）大地を駆ける……131
ソノ四・冗談と共に去りぬ……197
ソノ五・遊戯（ゆげ）する嘘と実（まこと）……265
ソノ六・放屁（おなら）怪談始末……331
ソノ七・バンジョ！（BANJYO）……439

装丁　菊地信義＋水戸部功
組版　紺野慎一＋高野智子

虚言少年　激闘編

ソノ一・馬鹿を嗣ぐ者

日ペンの美子ちゃん
貴ノ花が早く横綱になれるようお手紙を出しましょ
40年の歴史をもつ日ペンでボールペン字やお手紙の書き方をならったから自信があるの！ほーらきれいな字でしょ！
このパインダー式の教材がすばらしいんだニャーテキストはわかりやすいし当用漢字の筆順も教えてくれるニャー
一日15分の練習でペン字検定に合格できちゃうの！一級合格者の四割が日ペンの出身者なのよン
ほほう！きれいな字だねえ気分がすっきりしてバリバリけいこができそうだぞ
気分よくけいこしたらものすごくおなかがすいた！
やった！めかたがガッポリふえたを
そしてさらに…
……てなことにならないかしらねえ！ニャンコロ！

今は昔。
どのくらい昔かといえば、まあそこそこ昔である。
何ともはやぼんやりした物言いで申しわけない。
この野郎はっきり言え——と、仰(おっしゃ)るなかれ。
明言することができない理由は、これが果たしていつ読まれるものなのか判らないから——なのでもあるのだが、それだけでもない。判ったところで〝なんと大昔なのであろう〟と感じる方と、〝ついこの間じゃないかよ〟と感じる方の双方がいらっしゃるだろうことは明白だから、でもある。
誰が読むのか判らないのだし。
誰も読まないかもしれないけれど。まあ、あんまり読まれない気もするのだが。
ならせめて西暦なり元号なり、何か示せば良さそうなものでもあるのだが、そうもいかないのである。

六〇年代だとか八〇年代だとか、そんなふうにざっくり括ってしまうのは簡単ではあるのだけれど、ざっくり十年ごとに世の中がすぱっと変わるわけでもないだろう。元号にしても、昭和は六十年以上、平成だって三十年くらいはあるわけで。いずれもそこそこ長いのである。〝昭和っぽい〟なんぞというフレーズはよく耳にするのだけれど、昭和初期と昭和後期は天と地ほどに違うのだ。何といっても真ん中に戦争を挟んでいるのであるから、それはもう大違いだろう。でも、戦前と戦後で二分化されているわけでもないのである。〝昭和っぽい〟の昭和は非実在昭和なのである。

そんなわけで、そういう雑なラベリングは妙な色眼鏡というか、固定観念を引き寄せてしまう。そうしたバイアスがかかってしまうと、それはそれで色々と厄介かなと思うのだ。

いや——特定はせぬまでも、このお話がコンプライアンスだのポリティカル・コレクトネスだのSDGsだのガバナンスだのハラスメントだの、そうした諸々がまるで重視されていなかった時代の話であることだけは間違いない。重視されないどころか、まずそんな言葉がなかったのである。だから後の世の価値観に照らすなら叱られること請け合いだ。

勿論、似た概念はあったのだろうけれど、言葉がないということは概念ももやもやしていたということである。

それ、セクハラですよ！　も、コンプラ上まずいでしょうに！　も、言えないのである。たとえそう思ったとしても言葉がないのだから、いちいち説明に時間が掛かるのである。抗議するにしても注意するにしてもあれこれごたごたと御託を並べるしかないわけであって、そんな回り諄い指摘は極めて伝わり難いのである。いいや、伝わらないどころか却下されてしまうのだ。却下されるのみならず、さらに攻撃され排斥されてしまうという理不尽さである。

これが安土桃山時代だとか平安時代だとか、ギリギリ幕末だとかいうのであれば、既にして異世界だから、それもまあ仕方がなかろうと思えないこともないのだろうが、実はそんなにかけ離れているわけでもないという辺りがミソなのだ。

って――その時代の真っ只中で生きているこの僕がイヤになるくらいなのだから、後世に於ては何だコイツらと受け取る人も少なくなかろうと思うわけで。

だが。

このお話は、この時代はこんなにヒドかったダメだったと告発したり批判したりするものではないのだ。同時に、あの時代は色々と緩くて良かったとかあの頃はどこも適当で楽だったとか懐古するものでもない。そもそもそんなことはハナ毛の先ほども思っていない。懐かしいとも思わない。思えるわけもない。何故なら、僕にとってはそれが今だからだ。

僕はその時代に生きているのである。

だから懐かしめるわけもない。これから先どうなるのかも知らない——と、いうことになっている。

いずれにしてもそんな時代が舞台なのであるから、まあ読んで小肚が立つ人も少なからずいることだろうと、慮ってしまうが故の韜晦なのであった。

とはいうものの。

そうした社会の歪みみたいなものにぐいぐいと捩じられていたって、まあ人は何とかかんとか生きてはいたわけで、生きている以上は笑ったり愉しんだりもしていたのである。怒ってばかりいたのでは磨り減ってしまうし、泣いてばかりいてもひしゃげてしまう。自分で臍を擽ってでも笑わなければ、やってられないというものである。

このお話は——そういう、自分で臍を擽るような、深刻な渾沌の海の水面に浮かぶぺらっぺらの塵芥のような、軽薄で無意味でくだらない、まるで重みのない上澄みばかりを掬っただけの軽佻浮薄なお話なのである。

その程度のものなのであるから、どうか勘弁していただきたいものだ。

何しろ。

僕は子供なのである。

そう。僕は昔の子供なのだ。

子供なのだから物知らずではあるわけで、必ずしも正確な歴史認識の上に立って毎日を送っているわけでは——ない。

加えて、現状認識に関しても、巨視的な視野や長中期的展望を以て的確に捉えることができているわけでも——ない。

瑣末なことで落ち込んで、些細なことで浮かれまくって、目の前のことに一喜一憂し狭い社会の中で右往左往してジタバタ生きているだけである。

子供なのだから。

無知なのである。

いやいや嘘を吐けそんな無知な子供がこんな辛気臭い能書きをだらだらごたごたと考えているものか——と、仰るなかれ。子供でもこのくらいのことは考えているものなのだ。ただ、語彙が著しく少ないから表現できないでいるだけだ。そんなに言葉を知らないのである。

と、いうわけでこの文は、子供の脳内のだらだらごたごたを何とか読めるように、それっぽく大人の言葉に翻訳しているのだ——と諒解していただきたい。

つまり、一読成長した子供が過ぎ去りし昔を記した回顧録——のように読めるかもしれないのだけれど、それは違うのである。僕にとってはまさにこの昔が ド真ん中の現在なのであって、想い出なんかではない。だから。

今は昔――なのだ。
今が昔、でも良い。
どうであれ子供の考えることなのであるから、いずれそんな大したことではないのである。そこは疑いようがなかろう。従って、この話には感動もない。教訓もない。道徳や倫理めいたものは僕だってそれなりに持っているけれど、子供なんだから半端なものである。おまけにスリルもサスペンスも謎解きもないし――。
恋愛もない。
それはまるでない。
何故なら、僕はモテないし冴えないし見映えも悪い――その上にモテたいとか目立ちたいとか見目麗しくなりたいなどとは全く思っていない徹底的に色恋沙汰に縁のない子供なのだった。
青春もない。
青春こそないだろう。ときめきも甘酸っぱさも根性も努力もないのである。熱く滾る友情も迸る汗も頬を濡らす涙も、なーんにもない。それらの暑苦しいものとは一切縁がないのだ僕は。もう巴御前とアントニオ・ガウディくらい縁遠い。アニサキスとターボエンジンくらい無縁である。縁がないというより、その手のものを忌避しているのではないかと思えるくらいだ。

いや、友達はいる。仲の良い友達もたくさんいる。そこは子供であるから、恥ずかしげもなく親友だとか言ってしまうような間柄の奴もいる。いるのだけれど、関係はもっとずっとドライである。

例えば、その親友が崖から落ちそうになっているとして——まあ落ちたら死ぬような状況であれば僕だって躊躇なく救いの手を差し伸べるのだけれど、その崖がまず生き死にには関わらないだろう程度の高みであった場合、そして落っこちたらとても滑稽な状況が予想されるようなケースであった場合、僕は思い切り差し出した手を——引っ込める。いや。

崖の縁を摑んでいる友の手を。

踏む。うっかりを装って踏む。

で、躙る。当然うっかり躙る。

きっとそうする。

そして滑落して行く親友の、愕然とした、恐怖に染まった顔が遠ざかって行くのを眺めて——。

腹を抱えて笑う。

酷いと謂われても、そういう関係なのだから仕方がない。立場が入れ替わったとしても奴らは僕に同じ仕打ちをするに違いない。

その場合、僕は甘んじて転落するだろう。いや、無声映画のコメディアン宛らの珍妙な仕種と顔芸と悲鳴とで笑いを演出するに違いない。

痛くはあるんだろうが。

笑えるなら耐えるのだ。

僕と親友との間には、湿った友情ではなく乾いた笑いしかないのだ。

それでも親友なのだ。

仲が良いからだ。いやいや他の友達連中にはそんなことはしない。助けるかどうかは状況次第だが、少なくとも踏み躙りはしないのだ。ただの友達には。

大して親しくもない相手にそんなことをするのは鬼畜の類いであろう。極悪非道である。サイコパスとか呼ばれ兼ねない。下手をすれば刑事事件になる。傷害罪である。そんなことは絶対にしないのだ。知らない人だったら必ず助ける。僕らは善良なのだ。僕なんかは善良で親切で真っ当で、その上小心者でさえある。

でも親友の手は踏み躙る。

笑えるからである。

そう、僕は、いや僕らは、笑いを求めているのである。恋も夢も要らないけれど笑いだけは求めてしまうのだ。求めてはいるのだけれど、僕らが求めているそれが万人を笑わせられるような笑いなのかどうかという点においては甚だ疑問と言わざるを得ない。

一つだけ言えることは、後世においては問題視されることになるマチズモっぽいというかホモソーシャル寄りというか、そうした笑いを希求していないことだけは断言できる。弱者を吊るし上げて笑いものにするような笑いは、もう下の下の下である。笑えないだけでなく肚が立つ。

そもそも僕も、僕の親友どもも、体育会系なんぞとは程遠いへなちょこ揃いなのであるし、メジャーマイナーでいえば確実にマイナーなのだ。今はまだないスクールカーストとかいうものに当て嵌めるならば、もう最下層である。

だが、僕の生きている時代は、例えば親の年収だとか家柄だとか、成績だとかルックスだとか、そうした条件で階層が決まるというわけでも——ないのだ。

体がデカいとか声がデカいとか態度がデカいとか、その程度のデカいもんがぼこんと上に載っかっているだけである。

例えば僕らの時代よりもっと昔は、ガキ大将などと呼ばれる、主に男子の子供を頂点に据えたヒエラルキーがあったようである。しかし僕らの時代にその仕組みはもう、ほとんど機能していない。

ガキ大将システムの構成員は地縁を基盤とした小さいコミュニティである。その中の最年長者が年少者を統べるという構図が基本となる。育って子供でなくなれば集団から離脱し、次の年長者が繰り上がるという仕組みである。

まあ最年長というだけで知力体力が他の構成員よりある程度勝っていることは想像に難くない。同年齢の構成員がいる場合はポストを争うことになるが、その場合は多く腕力がものを言う。実際に闘うことはしなくとも、強そうなのが選ばれるのだ。年長者がヘタレのようなケースでは下剋上のようなこともあったようだし、集団を離脱する前に禅譲するようなこともあったようだが、ベースになるのは年功序列である。

縦社会なのだ。

畢竟、ガキ大将にはコミュニティ内の秩序維持や外部の攻撃から構成員を護るという役割が生ずる。特に幼児は保護せねばならない。構成員は引き換えに忠誠を誓い、奉仕をするという構造である。江戸期の宿場の地回りのようなものだ。みかじめ料を徴収する代わりに治安維持を保障するのである。

威張るだけではいけないのだ。

今は違う。クラスはみんなほぼ同じ齢の子供の横並びである。学年を越えた交流もないわけではないけれど、生活の多くは同じ年齢の者どもと過ごすのだ。

学校を離れた場であれば、地縁に拠るコミュニティもそこそこ残ってはいるのだろうが、それはもうプライベートなものでしかなく、パブリックにおいてそれはほぼ消滅しているのである。

加えて。

そうしたシステムは、時代と共に変質してしまうものなのだ。地回りがヤクザに、ヤクザが暴力団に、そして反社会勢力にシフトしていった——というより評価が変わったのと同じく、システムの基盤を失ったガキ大将は単に暴力的支配者——いじめっ子と同義になってしまっているのだった。

それ以前に、戦前戦中に於けるガキ大将システムは疑似軍隊の様相を呈していたのである。何しろ権力を維持するための仕組みが年功序列で暴力容認、上意下達で絶対服従なのであるから、これは仕方があるまい。軍隊の相似形である。それ以前に、子供は大人を真似するものなのだ。当時のお子達にはカッコ良く見えていたのだろう、兵隊さんが。考えるだに恐ろしいことだが、責めることもできまい。

大人が悪い。

それに、ガキ大将システムは多く女性を排除した形で成り立っている。

これもどうか。まあ、僕らの時代でもすでに男女の同権は叫ばれていたのだし。いや叫ぶというならもうずっと前から叫ばれていたのだ。

実現はしてないのだが。

とはいえ性別に拠って生活集団を分けて育てるという仕組みは明治以前のこの国に於ては階層を問わずに適用されていた慣習でもあったわけで、ガキ大将システムはその延長線上にある文化なのだろうから、仕方がないといえば、ない。

というわけで、ガキ大将などという呼称もポジションも、僕らの時代に於てはもう黴の生えた古臭いものでしかなかったのである。そういう形で統率の取れた子供社会は既に消滅しているのだ。

だからまあ、デカいかどうか程度の差しかないのである。

で——そのデカいのが威張るためぶいぶいと周囲にマウントを取ってきたりするのかというと、そんなこともないのだった。そういうウザい自己顕示の仕方がのさばってくるのは、もっとずっと後のことである。

要は、デカいのは目立つ——というだけなのである。体がデカい声がデカい態度がデカい、もう顔がデカいだけでもいいくらいだ。それだけで手間のかかるマウント取りなんかしないでもセンターは取れる。周囲が、もう面倒だからあれを真ん中に置いておけよ目立つし——という判断を下すんだろうと思う。

ただ不思議なことに、どういう具合なのかは知らないが、腰巾着というか子分というか、そういう依願下僕のような連中が何人か勝手にデカいもんの下につくものなのである。これはいにしえのガキ大将システムの名残なのかもしれないのだが、こいつらを従えているから承認欲求もそれなりに満たされていて、その結果無理にマウントを取るようなこともしない——というのが正解であるのかもしれない。いや、そもそもそんなデカいものと張り合うだけのボリュームを持った奴がいないことの方が多いのだ。

一方、子分は子分で、デカいのの下についたからといって位が高くなるわけでもないのである。むしろうんと低まる。

デカいのからセンターを譲ってもらえるわけでもない。ナンバーツー的な立ち位置になることもない。これは無駄な奉仕である。好きでやっているのだ。

ガキ大将システムと違ってこの構図は男子に限ったものではない。

女子の場合は、デカいというよりも意識が高いように見える者がセンターを取ることが多い。勿論女子でもデカいからセンターというケースもあるようだが、そう多くはない。丁度（ちょうど）、ウーマン・リブなんかが脚光を浴びている時期でもあるから、その影響もないとは言えないけれども、そこは子供であるからそれっぽいというだけである。まあ男子なんぞという小汚くて阿呆（あほ）な生き物には負けないぞという実に頼もしい方々である。

勝ちも負けもないのだけれど。

これもまあ、面倒臭いからセンターに置いておけと周囲がそう思うからこそ真ん中に行く——というだけである。

一方で、同じ意識高いように見える系のバリエーションとしては、お嬢様キャラというのもある。

左翼運動のカウンターとして誕生したウーマン・リブと、資本家と旧態の象徴のようなお嬢様とはかなり質の違う属性だと思うのだけれど、そこは子供なので仕方がない。

ただ、このタイプはほぼ存在しない。

いや、いつの時代にも貧富の差というのはあるわけで、勿論金持ちの子というのは存在したわけだけれど、家の経済事情とお嬢様はあまり関係ないのだ。

僕が生きているこの時代、実家が太いというのは男女問わずにあまりインパクトのある属性とはなり得ないようである。せいぜいがところ『ドラえもん』のスネ夫程度のポジションが関の山なのである。多少目立ちこそするのだが、金持ちだというだけでセンターは取れない。

この場合のお嬢様は、多く非実在お嬢様なのである。これは自称――ということではない。別に家が経済的に恵まれているわけでもないのだけれどナチュラルにそういう振る舞いが身についている人、ということである。これはキャラ立ちはするものの、頭一つ抜けるまでには到らないことが多いのだけれど。

で、女子の場合も、意識が高げな者だとかお嬢様っぽい者の周りには、まあ男子と同様に取り巻きというのがいるわけである。これも男子同様、クラス内のポジションが高いわけでもない。子分というわけではないから男子の取り巻きほど位が低いことはないが、まあ別に何かメリットがあるわけではない。

好きでやっているのだ。

というわけでデカいとか高いとか、そういうのがまあ、天辺にいるのだ。

それから、学年トップの秀才だとかスポーツ万能だとか、とにかく一芸に秀でているような数名は、やはりそれなりに一目置かれることになる。こういう連中が、デカいのとか高いのの次に位置することになる。

これはまあ仕方がない。実力である。

さらに、一芸はなくとも多少は目立ちたいとか異性にモテたいとかウケたいとかいう戯けものというのが一定数いる。要するに人気者か、人気者見習いか、人気者の成り損ね、である。コメディリリーフ、ムードメーカー、ギャグ担当、そのあたりのポジションだ。すべってもウケずとも、エンターティナーを目指して精進している芸人のような者どもである。

こういうのはまあ、善きにつけ悪しきにつけ、それなりに目立つことは目立つ。これが一芸組の次に位置する。

その次に、品行方正で礼節を弁えた立派なお子様達が続く。女子の多くはこの枠である。

いや、女子の場合、品も正しさも礼も節度も、お前もう少しなんとかせいやーというケースであっても、頑なにこの枠なのだと主張する。非実在お嬢様がトップになるようなケースは、この品行方正組の数が多い場合である。品行方正の象徴として祀り上げられるのだろう。

だからこそ、別に本物のお嬢様である必要はないのだろう。実家の経済状況なんかは無関係なのである。そう見えればいいのだ。子供なんだから。

ちなみに、見た目というのは、関係ありそうでいて、実はそう大きな要因とはなり得ない。子供の場合はルッキズムのような偏見の基準が極めて緩いのだ。

まずそれぞれの美の基準が曖昧（あいまい）だ。そして各々（おのおの）の美意識よりも対象が発揮している主張の方が確実に勝つ。そこには客観性もない。あたしは可愛いのよという主張を疑いなく持っている者は、周囲からもそのように扱われることが多い。多少のギャップはあえて許容する。

いや、あまりにもギャップが激しい場合もないわけではないのだけれど——そういう場合は、そこんところだけアンタッチャブルな領域と規定して、見て見ぬふりをして付き合うことになるのであった。あくまでも自己申告を優先するのだ。本人がそう思っているんだからいいじゃないかという寛大な心で——いいや。寛大というよりもそんなことはどうでもいいのである。お前、自分が思っているより可愛くないぞと指摘することにどんな意味を見出（みいだ）せというのか。そもそもみんなそんなに違わないから、見た目。

と——いうわけで、こういう連中が階層の上の方にいるということになるわけであるが、男子の場合、この上・中層は全体の三分の一程度の割合となる。女子の場合は四分の三くらいだろうか。

残りは下層ということになろう。

男子の三分の二、女子の四分の一を占めているのだから、これは最も多数派ということになる。けれどもこの多数派は、たしかに下層でこそあるのだが、虐げられているわけではない。搾取されてもいない。辛い思いもあまりしていない。

この層の連中は――。

ただだらーんとした有象無象だというだけである。

だらーんとした有象無象は、上に昇ろうとか目立ちたいとかモテたいとかもあんまり思っていないのだ。寝て起きて喰って垂れて、泣いて笑って、ただひたすらもーっと生きているだけなのだ。もーっと。

で。

僕なんかはモロにそのポジションなのである。

そして僕の親友達もそのもーっとした集団の中にいるのだ。

モブである。ガヤである。その他大勢である。書き割りである。映画化されてもセリフはおろか役名すらなく、エンドロールも三列並びで五十音順とか、いや協力・何とか市の皆さんとかで済まされてしまうようなものなのである。

それでも、不当に蔑まれているなんぞという意識はない。だから何だ、という話である。僕はむしろこのポジションが心地好いのだ。

カーストというよりも、役割分担という感じであろうか。しかも。

それぞれの役割は、強制的に割り振られたものではなく、それぞれが自ら選び取ったものであり、また集団がそうと認めたものでもあって、自然発生的にそうなっちゃったものなのである。

文句を言う相手もいない。

いや——まあ上に載っかってる野郎がそのモブの中の一人を引っ掛けて、吊るし上げにして甚振ったりするというような事態になると、それはもうイジメに他ならないのだけれど——そうしたこともまったくないということはないのだが——どういうわけだかそんなにないのだった。

面白くないから、イジメは。

いや、例えば経済的格差を始めとする諸々の偏見だとか差別だとかいう深刻な問題はどんな時代にだってあったわけで、そうした振る舞いはいかんことだ、やっちゃならんのだという認識は昔の子供である僕らにもちゃんとあるのだ。

それ以前にそうした自分の役割を無視したような逸脱行動というのは、やはり面白くないのである。調和を乱すとかモラルがどうだとかという大袈裟なことではなくて、ただ面白くないのだ。

だからやらない。

イジメや差別がまるでないとは言えないわけだが、あったとしても、無視したり乗っかったりすることはほぼない。自然淘汰的とはいうものの、イジメた奴や差別した奴はそれなりに糾弾されることになる。

面白くないからだ。

僕は、そんな時代に生きている。

と、いうかどこもかしこも皆そうだというわけではないのだろうから、時代で輪切りにしてしまうのも如何なものかと思うのであるが、まあ僕の周辺は今、そういう仕組みになっているのだ。コンプラも何もあったもんじゃないハラスメント社会ではあるけれど、そんな地獄でもそれなりに身を捩って生きているのである。

なんぞと——何だか偉そうに語ってはいるものの、僕はただのその辺に転がっているだらけた子供なのだ。そこを忘れてもらっては困る。

そもそもただのその辺に転がっているだらけた子供の日常に、ドラマチックな展開はない。だから何かを期待されても甚だしく困る。僕の語ることは、押し並べてくだらないことなのである。ただひたすらにくだらないのだ。

残念ながらこの先に社会問題を剔出し批判を加えるような高尚な展開はない。

愚かしい物知らずの子供がぐだぐだと過ごす断片を語るだけなのだから、そこに何らかの意味を見出そうと努力したところで、それは徒労というものである。

何といっても。

僕はただの子供であるだけでなく、ただの馬鹿な子供なのである。

いや、頭が悪いということではない。

そんなに良いとも思わないけれど、極めて悪いということもない——と思う。

学校の勉強はそんなに好きではないけれど、何かを学ぶことは愉しいし、偏ったこと余計なことは結構知っていて、後の世ではヲタクなどと呼ばれるであろうことは間違いない——そういう子供だ。

ではどの辺が馬鹿なのかといえば、それに就いては説明が——難しい。

ただ、賢くて素直でお利口な子供でないことだけは確実である。

しかも、ただ馬鹿であるというだけではない。僕は馬鹿なものが、馬鹿なことが好きな馬鹿なのである。

解り難くて申しわけない。

大変定義し難いのだが、僕の言う馬鹿とは、まったく世の中の役には立たないが世の中を悪くするものではなく、誰かを傷つけたり悲しませたりすることはなく、また功利的でも効率的でもなく、露悪的でもなければ巫山戯ているわけでもなく、手間は掛かっても徹底的に無意味で、知的であっても間抜けでもあり、愚かしく救いようもないというのに、それでいてこの上なく可笑しい——そういうものごとのことである。